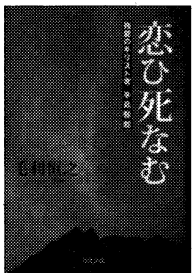


恋ひ死なむ

毛利恒之著

殉愛と愛国のキリスト者



昭和二十三年に熊本で

「キリストの幕屋」を創始した手島郁郎(いくろう)の伝記。「幕屋」は戦後日本生まれのキリスト教で、神道や仏教など日本の伝統宗教を尊重し、靖国神社に参拝するほか、保守系の政治活動にも参加するなど、キリスト教の中では異色。無

教会の系譜にありながら、ヘブライ的な「原始福音」に帰ることを目指す。著者は郁郎の記録映画制作にも関わっている。

タイトルは殉教ならぬ殉愛の決意を詠んだ郁郎の歌「恋ひ死なむ後を思はで生き狂ひ 死に狂ふとも愛に仆(たふ)れむ」から。「愛とはキリストの別名」だという。

郁郎は明治四十三年、島根県生まれ。熊本出身の両親は二人とも教育者で、父は郡視学だった。家は元は浄土真宗だったが、伯父が日清戦争で戦死し、靖国神社に祀られたのを機に神道に改宗している。

郁郎がキリスト教に触れたのは熊本で小学六年の時、賛美歌に心奪われたという。十六歳で受洗母は反対したが、父は認めた。その後、次第に無教会に引かれ、内村鑑三や塚本虎二、賀川豊彦の影響を受ける。

商業学校を卒業後、戦時下の朝鮮や中国でアルミ再生業を営みかなり成功するが、敗戦で引き揚げ。熊本で製粉業を興し、塩田、漁業などにも手を広げるが二年で解散。妻の喫茶店を支えに伝道生活に入った。

ところが二十三年、進駐軍へ抵抗して追われ、

阿蘇山に潜伏。救いを求める祈りの中で神の召命を受ける。「これが道なり、これを歩むべし」という旧約聖書「イザヤ書」30章の聖句が黙示されたという。

その後、二十五年に阿蘇山での研修会で、新約聖書の使徒行伝にあるように、参加者に聖霊が降臨し、異言(いげん)を語りだすという霊的覚醒を体験し、これが「幕屋」の実質的な始まりとなる。もともと、異言については無教会派の中でも賛否両論があり、やがて郁郎らは独立していく。

昭和四十八年に昇天した郁郎は「日本を愛せず、どうして日本伝道ができればか」との言葉を遺している。(ミルトス、税込1575円)

BOOK REVIEW

書評